

13の講義内容

言語文化「西欧言語文化圏」―その2 イタリアと日本―

1 天正遣欧少年使節Ⅱ伊東マンシヨ、原マルチノ、千々石ミゲル、中浦ジュリアン

正遣欧少年使節の来訪を伝える印刷物、一五八六年（京都大学図書館蔵）



2 ジョバンニ・バチスタ・シドツチ(1668~1715)

鎖国の江戸時代にイタリアから日本(屋久島)に来訪したシドツチという人物についてどの程度知っておられようか。まず先週の流れに即して、このシドツチについて解説する。

《参考資料》

シドツチ

<http://www.komazawa-u.ac.jp/~hagi/shidochi.pdf>

※新井白石『西洋紀聞』を読もう！



3 日本人宣教師ペトロ・カスイ・岐部

ペドロ岐部 松永伍一著 中公新書

大分の先哲

<http://www.e-obs.com/rekisi/sentetu/shokai/petoro.htm>

ペトロ岐部

http://tanizoko2.hp.infoseek.co.jp/peter_kibe.html

ペトロ岐部を知っていますか？

<http://blogs.dion.ne.jp/mrgoodnews/archives/1822791.html>

ペトロ岐部カスイ(宮崎県)

<http://www.kyushu01.com/01/0704/0704-135.html>



ここに、ペトロ岐部に関する「花ある風景」（銀座一丁目新聞）からの一文を紹介しておきたい。

並木 徹

ペトロ岐部神父について

遠藤周作の著書『走馬灯』（毎日新聞刊・昭和五十二年五月二十日発行）に「国東半島」と題して江戸時代、拷問に屈せず殉教した神父・ペトロ岐部について触れている。ペトロ岐部は十九歳のとき有馬の神学校に入りラテン語やポルトガル語を学び、卒業後、外人宣教師や修道士の世話をしたり通訳をしたりする仕事をする（同宿という）。二十六歳のとき、家康のきびしい禁令をのがれてマカオに行く。さらにエレサレムを経てローマまで足を延ばす。ローマのグレゴリオ大学倫理神学科に入学する。三年の留学を終えて一六二三年（元和九年・徳川秀忠將軍宣下）帰国の途に就く。薩摩の坊の津に着いたのは、日本を離れて十六年も立っていた。日本では切支丹迫害の嵐が吹きすさぶ。長崎から東北の伊達領で宣教中捕縛される。一六三九年（寛永一六年・一六三七年から一六三八年に島原の乱が起きる）である。幕府の評定所で残酷な拷問を受けるも屈しなかったため殺害される。別の資料によると、この時、幕府はかつて日本の布教長であり、のちに背教したクリストヴァン・フェレイラにペトロ岐部を説得させようとしたが、ペトロ岐部は逆に背教者に信仰に立ち返るよう勧めたという。しかも一緒に捕まって拷問にかけられている若い同宿に「転ぶな、偉大な神がきつと抱いてくださるのだ」とはげました。

松永伍一著「ペトロ岐部」（中公新書・昭和五十九年十一月二十五日発行）は記す。『ヨハネ伝十章に言う「誠に汝らに告ぐ、一粒の麦、地に落ちて死なざれば、ただ一つにてあらん。もし死なば、多くの果を結ぶべし」を、わが身の営みにしようとう魂を浄化し、日本式十字架にかけられて死んだとき、キリスト教の側からみれば、「イエズス会士の輝ける殉教」の一例にすぎないとしても、わが国にとっては十七世紀に世界を歩いてユダヤ教徒、イスラム教徒などの生體をも知った最大の国際人を、鎖国の徹底化と引き換えに殺した不幸な事件となった」。ペトロ岐部は実にえらい尊敬すべき神父であった。

遠藤周作は「国東半島」最後の下りで「正月になると、毎年、世田谷に住む岐部豊さんから年賀状を頂く（現在・江東区亀戸に在住）。私はその年賀状をじっと見つめる。このペトロ岐部の血を引いた人だからである」と書いている。その岐部豊さんからこの八月の初め、ペトロ岐部に関する資料・本五冊とスクラップ帳二冊が届いた。実は岐部豊君は大連二中の同級生である。岐部君が念願するのは、**ペトロ岐部遺徳を顕彰する会の財団化**、その生涯をテレビの**大河ドラマにすること**、**列聖化**などである。これまでもその実現化にそれなりの努力をしてきた。八〇歳を過ぎても並々ならぬ情熱を持っているのに敬服する。スクラップ帳の新聞によると、昨年十一月二十四日、長崎市の県営球場でローマ法王庁による「ペトロ岐部と一八七殉教者列福式」が行われている。死後、信仰の模範にふさわしいと認められる信者を「聖人」に次ぐ敬称である「福者」として宣言するカトリックの式典である。日本での開催は初めてであった。ペトロ岐部の生まれ故郷、大分県国東半島の北端・岐部には320年記念祭（昭和三十四年九月二十四日）に建てられた十字架がある。平成四年十月には大分市で県民オペラ「ペトロ岐部―転び申さず候」が上演され、ペトロ岐部の遺徳はそれなりには知られている。その遺徳を「地方区」から「全国区」にしようとするのが岐部君の切なる願いである。と述懐しながら彼の人物像をこのようにまとめている。

4 明治と西洋文化 ―食の文化を中心に―

次に、世界中の飲食物を一同に口にする現在の日本人は、まさに食通も超食通だといえよう。だが、明治時代以前の日本人は、佛教の戒律に従って肉食を好まず質素な食生活を営んでいた。この肉食が日本で正に解禁されたのが明治時代であった。「牛鍋屋」が繁昌する。日本最初の店は、幕末一八六二（文久二）年に横浜の居酒屋「伊勢熊」で牛肉の煮込みを出したのがはじまりだが、一八六八年（明治元年）、横浜伊勢佐木町「太田なわのれん」がぶつ切り牛肉を江戸前味噌で煮ることで広がりを見せはじめた。このことを初代、仮名垣魯文が『安愚樂鍋』として世に喧伝している。また、作者魯文は、『西洋道中膝栗毛』（岩波文庫刊）なる弥次喜多道中の海外旅行話しを製作しているので、これを絡めながら今回、久米邦武編『特命全権大使米欧回覧実記』（岩波文庫刊）のなかでの「衣・食・住」の営みに目を向けて、これを読んでいただきたい。

《参考資料》 <http://www.nichibun.ac.jp/graphicversion/dbase/kairan/index.html>

『安愚樂鍋』 <http://www.library.metro.tokyo.jp/17/023/17100.html>

『西洋道中膝栗毛』 http://www.komazawa-u.ac.jp/~hagi/DB_seiyodoutyuhizakurige.xls

『特命全権大使米欧回覧実記』 <http://www.keio-up.co.jp/iwakura/index.html>

『東京開化繁昌誌』 <http://www.iwanami.co.jp/BOOKS/24/0/2402010.html>

一八六九（明治二年）、福沢諭吉著『頭書大全世界國畫』（慶應義塾出版局版）